

生命の精神論 序説

近藤 剛

はじめに

人間の生存にとって物理的な衣食住の獲得は、まさに死活問題である。しかし、そのことだけで人間の実存は満たされない。なぜなら、人間には生きるための意味、求めるべき価値、果たすべき目的といった精神性の充足が求められるからである。それらは「大義」という概念に集約され、時に命を賭してでも成し遂げるべき行動へと駆り立てる。

一般的に大義とは、人として遵守すべき道義、尽くすべき道理と理解されるが、かつては国家や君主への忠義として体現されていた。ことに戦中の日本人にとって大義とは天皇への忠節であり、そこに「国体の本義」も見出された。ところが、第二次世界大戦の敗戦を契機にして、それまでの滅私奉公は滅公奉私へと転換され、大義という発想そのものが打ち捨てられてしまった。それは不合理な旧弊の打破、支配的で抑圧的と見なされた忠義からの解放を意味し、個人が自由な価値観を求めて自己本位に生きることのできる権利を正当化するものだった。

たしかに自由と権利は魅力的であるが、その保持には応分の責任と義務が伴われ、高度の自立と自律が求められる。今日、責任なき自由と義務なき権利へとひた走る姿勢、すなわちエゴへの囚われは、我欲を押し通す横暴となるか、閉鎖的な言論空間での独善となるか、世情に対する無関心となるかである。いずれにせよ、大義とすり替えられた我執の誇示によって、人としての品位は地に堕ちていくことだろう。混沌とした精神状況は、やがて生の虚無化をもたらすことになるだろう。

歴史的に積み重ねられてきた道義や道理を包括する大義は、今や国家運営からも喪失されつつある。人間の我欲が全面化された民主主義と、人間の心身ともが商品化された資本主義に覆い尽くされた中では、大義など問題にならないのかもしれないが、自国第一主義の名目のもと、あからさまなエゴイズムがのさばるような状況を楽観視してもいられない。現状のよ

4 精神文化学研究[第8号]

うな出鱈目なことばかりが繰り返されていくと、やがて国運も尽きることになるのではないかと憂慮される。私的に閉ざされるのではなく公的に開かれたかたちで、何かのために生きるということ（何かのために殉じるということ）が生命を澁刺たるものにする应考虑すべきではないか。大義に殉じること、すなわち人生を賭して自らを捧げる行為の意味について論究することが、本稿の目的となる。

1. 大義の末の末一戦後の精神状況

かつての日本人にとって大義とは天皇であったと述べたが、それを端的に表しているのが、杉本五郎（1900-37年）の『大義』（1938年）である。日中戦争に従軍した杉本は壮絶なる戦死を遂げたことで軍神と讃えられたが、彼の死後に刊行された『大義』は青年将校のみならず、士官学校や一般学校の生徒に対しても多大な影響を与え、戦時下の死生観を決定づけたと言われている。

『大義』において、天皇は絶対的観念もしくは超越的存在として描かれている。

「天皇は 天照大御神と同一身にましまし、宇宙最高の唯一神、宇宙統治の最高神。國憲・國法・宗教・道徳・學問・藝術乃至凡百の諸道悉皆 天皇に歸一せしむるための方便門なり。即ち 天皇は絶対にましまし、自己は無なりの自覺に到らしむるもの、諸道諸學の最大使命なり。無なるが故に、宇宙悉く 天皇の顯現にして、大にしては上三十三天、下奈落の極底を貫き、横に盡十万に亘る姿となり、小にしては、森羅萬象 天皇の御姿ならざるはなく、垣根に啣く虫の音も、そよと吹く春の小風も皆 天皇の顯現ならざるなし」「日本臣民は自己の救済を目的とせずして、皇威伸張を目的とせざるべからず。勿論自己は、皇威に於て救はる。然れども救はれんがために 皇威伸張を念願するにあらず」¹。

¹ 杉本五郎中佐遺著、戸塚陸男解説、大義研究会監修（2019年）『大義』（改訂第三版）産経メディックス、27頁。

『大義』では、皇運扶翼という大義に殉じる生き方が称揚されているが、敗戦後、これは戦時下の特異な思想傾向であると断罪されることになる。それはいわゆる「天皇制ファシズム」下でのファナティシズムであると非難され、国粹主義的な洗脳教育からの脱却が声高に訴えられた。

この経緯について、城山三郎（1927-2007年）の小説『大義の末』（1959年）を参照しながら考えていきたい。「柿見の家の納戸には、本を容れたいくつものリンゴ箱がある。節穴の多いその箱の一つに、杉本五郎中佐著『大義』がしまわれていた。中学時代、若い体操教師の高橋がすすめたものだったが、その頃の柿見たちの胸にりんりんと迫るものがあり、「汝、我を見んと要せば尊皇に生きよ。尊皇精神のある処、常に我在り」にはじまるいくつかの節を暗誦したこともあった。復員後さまざまの噂におそれ、戦争をめぐる大ていの本は処分したのだが、これだけは、そのときなお愛着深く、ほこりを吹くと、そのまま箱の底深く戻しておいた……」²という文章から始まる。城山本人は海軍に所属し、伏龍部隊の訓練中に敗戦を迎えている。同時代を生き抜いてきた苛烈な経験に基づいて、彼自身の写し鏡のような柿見という軍国少年を主人公に見立て、その人生を通して戦中・戦後の不条理を巧みに描写している。

戦場に赴いた若者たちは、天皇と皇国日本に身を捧げる大義こそ理想的な価値観であり、自らの生きる道であると信じて果てたが、敗戦後、その至誠の行為は気高く尊いものだったと称賛されることはなく、むしろ犬死であるかのように冷淡にも蔑まされることになる。なぜなら、指導的な立場にある大人たちは一夜にして態度を反転させたからである。つまり「民主主義」の名のもとに忠君愛国といった大義を全否定し、果敢に散った若者たちを「日本帝国主義」や「天皇制イデオロギー」における犠牲者として回収してしまったのである。大義は潰え、理想は砕かれ、挫折と絶望が漂う戦後にあって、戦死を殉死と美化することなど許されなくなる。むしろ、大義の名のもとに惨たらしい犠牲の醜悪さを糊塗してきたことに対して、憤怒と嫌悪が湧き上がってくる。このような心情が戦後の天皇制をめ

² 城山三郎（2020年）『大義の末』（新装版）角川文庫、7頁。

6 精神文化学研究[第8号]

ぐる議論の出発点であることが『大義の末』から読み取れる。例えば、次のような記述が印象的である。

「当時の学生たちの思潮の中では、天皇制賛成論は不利であった。反対論者が、まだまあらしい戦争責任を持ち出し、論旨も強力で説得的であるのに対し、賛成論者の論旨はあいまいで控え目だった。反対論には圧倒的な拍手が、賛成論には間断ない弥次が型通りに送られ、賛成論がきまって破れた。破れるにきまっている賛成論をとろうとする弁士がなくて、籤引きで割り当てたりすることもあった。こうした論議は時には聴衆からも論者自身からさえも遠いところで論じられているように見えた。かつて柿見たちをとらえた『大義』の圧倒的な感動、その重量感の記憶と戦っている論者はなかった」³。

さらに、「日本帝国主義」や「軍国主義」を痛切に反省したり否定したりしながらも、まともや天皇を権威として戴き、その政治利用を画策する戦後の動向についても、城山は手厳しく非難する。

「天皇というものは、支配権力にとって実に便利な存在だからな。国民の総意を代表し、それを越えた存在ということにしておけば、たとえ自分たちが不都合なことをしても、天皇の意志だと責任を逃れられる。国民の批判を無視することができる。世論にすり代り、世論をおさえつける権威—天皇元首説がまた出てくる筈だ。しかも、憲法改正ということで再軍備と結びついて。……国防などと言ったって、結局、そのときの政治権力を守るだけ。国民は狩り出され殺される。そんなとき、一番適当な冠が天皇制だ。天皇という一語ですべてが正当化される」⁴。

こうした論調にしたがえば、天皇の存在はご都合主義的に利用されてきたものであり、大義と言ってみたところで所詮は偽装されたものにすぎな

³ 前掲書、64頁。

⁴ 前掲書、173頁。

い。戦中においては、他の選択肢が排除された中で押し付けられた大義であり、半ば強要されたような殉死を賛美することなどあってはならない。これが戦後の言論空間で大勢を占めてきた理解なのであって、強烈な拒否感とともに、大義という概念は忌避されていったわけである。

2. 三島由紀夫の問題提起

上述のような大義をめぐる言論状況において、挑戦的な試みを企てたのが三島由紀夫(1925-1970年)である。奇しくも今年(2025年)は生誕100年の節目を迎え、出版界をはじめとして様々な行事が催されているが、三島が文字通り死にものぐるいで絶叫した信念が現代を生きる緩慢な日本人にどの程度まで響き伝わっているのか、正直なところ筆者には分からない。

大義を再び見出さねばならないと強調した三島の考え方について、その詳しい理由を1966年のインタビューから抜粋してみたい。

「武士は、普段から武道の鍛錬はいたしますが、なかなか生半可なことで、戦場の華々しい死なんてものはなくなってしまった。そのなかで、汚職もあれば社用族もあり、今で言えば、このアイビー族みたいなものも、侍の間で出てきた時代でした。そんななかで『葉隠』の著者は、いつでも武士というものは、一か八かの選択のときには、死ぬほうを先に選ばなければいけないと口をすっぱくして説きましたけれども、著者自体は長生きして畳の上で死ぬのであります。そういうふうに武士であっても、結局死ぬチャンスがつかめないで、死ということを心のなかに描きながら生きていった」「そういうことで仕事をやっていますときに、なんか生の倦怠と言いますか、ただ人間が自分のために生きようということだけには、いやしいものを感じてくるのは当然だと思ふのであります。それで、人間の生命というものは不思議なもので、自分のためだけに生きて自分のためだけに死ぬというほど、人間は強くないんです。というのは、人間はなんか理想なり、何かのためということを考えているので、生きるのも、自分のためだけに生きることには、すぐ飽きてしまう。すると、死ぬのも何かのためということが必ず出てくる。それが昔言われていた大義というものです。

8 精神文化学研究[第8号]

そして大義のために死ぬということが、人間のもっとも華々しい、あるいは英雄的な、あるいは立派な死に方だというふうと考えられていた。しかし、今は大義がない。これは民主主義の政治形態ってものが、大義なんてものはいらぬ政治形態ですから当然なのですが、それでも、心のなかに自分を超える価値が認められなければ、生きてることすら無意味になる、というような心理状態がないわけではない⁵。

戦後の生の在り方に倦怠感を覚え、自己中心的な生き方を卑しいと評し、自分を超える価値が認められなければ、生きてることすら無意味になると三島は主張している。人がただ生き延びることのみに腐心するようになると、生命（維持）尊重主義の虜となり、利己主義が勝り、その他の価値は蔑ろにされる。危険を顧みずに果敢に挑戦することはなくなり、自己の働きはより内向的に閉ざされて、生命活動そのものが萎縮してしまうことになる。人生は悄然とし、やがて生の虚無化をもたらすことになるだろう。このようなニヒリズムに耽溺しているのが、戦後日本の姿なのではないか。生の倦怠、閉塞、虚無によって、自己の内奥までも腐蝕されてしまうのではないか。

こうした風潮に対して反撃するために、換言すれば「戦後民主主義」の欺瞞に一撃を与えるために、三島は日本の文化伝統への回帰を大義に見立てようとする。彼の『文化防衛論』（1969年）によれば、文化伝統とは国民の「精神の形（フォルム）」であり、日本の場合、それは天皇の存在⁶に集約される。つまり、天皇とは「日本文化の歴史性、統一性、全体性の象

⁵ 「三島由紀夫 - Yukio Mishima on WWII and Death - Full NHK Interview (1966)」 https://www.youtube.com/watch?v=hLGMm6c_BCA（最終閲覧日：2025年2月27日）から引用。

⁶ 『文化防衛論』によれば、日本文化の特徴は「みやび」であるが、その源流は「古典主義の極致の秘庫」としての天皇にある。「宮廷の文化的精華であるみやび」の「まねび」に発しているのが民衆文化であり、「幽玄」「花」「わび」「さび」は「みやび」を中心とした衛星的な美的原理として説明されている。「みやび」は日本浪漫派の蓮田善明における鍵概念であり、また彼の自決が三島に与えた影響も多大であるが、ここでは両者の関係性について深追いしない（例えば、小高根二郎（1970年）『蓮田善明とその死』筑摩書房、464-476頁を参照されたい）。

徴」「体現者」であり、なおかつ「窮極の価値自体」^{ヴェルト・アン・ジッヒ}⁷であり、日本文化を守ることは天皇を守ることに帰着するというのが三島の見解である。そして、ここでの「守る」という意味は独特の生命論に裏付けられており、守勢的ではなく攻勢的な性質を持つと考えられ、それは「生み」「成る」へと展開される。三島は次のように述べている。

「文化における生命の自覚は、生命の法則に従って、生命の連続性を守るための自己放棄という衝動へ人を促す。自我分析と自我への埋没という孤立から、文化が不毛に陥るときに、これからの脱却のみが、文化の蘇生を成就すると考えられ、蘇生は同時に、自己の滅却を要求するのである。このような献身的契機を含まぬ文化の、不毛の自己完結性が、「近代性」と呼ばれたところのものであった。そして自我滅却の栄光の根拠が、守られるものの死んだ光輝にあるのではなくて、活きた根源的な力（見返す力）に存しなければならぬ、ということが、文化の生命の連続性のうちに求められるのであれば、われわれの守るべきものはおのずから明らかである。かくて、創造することが守ることだという、主体と客体の合一が目睹されることは自然であろう。文武両道とはそのような思想である。現状肯定と現状維持ではなくて、守ること自体が革新することであり、同時に、「生み」「成る」ことなのであった」⁸。

今日、天皇をはじめ日本の文化伝統を保守することは、より革新的であることを求めているので、三島の指摘は言い得て妙である。ところで、文化における生命の連続性を守るためには自己放棄が必要であり、生きていくことがありありと自覚されると、そのような衝動へ突き動かされていくと述べられている点は、実に興味深い。この議論の背景には、三島が傾倒したジョルジュ・バタイユ⁹の「エロティシズム」概念が控えているように

⁷ 三島由紀夫（2006年）『文化防衛論』ちくま文庫、80頁。

⁸ 前掲書、53-54頁。

⁹ 三島に対するバタイユの影響については、田坂昂（1985年）『三島由紀夫入門—三島美学の核心と作品にみるその構造—』オリジン出版センター、28-38頁、執行草舟（2025年）『永遠の三島由紀夫』実業之日本社、204-207頁を参照されたい。

思われる。

<美・エロティシズム・死>という問題連関¹⁰が三島の行動原理を説明するものであったことは、よく知られている。人間のエロティシズムは、動物のそれとは異なる独自性を持っている。つまり、生殖、種の保存、繁栄とは無関係であり、いわば「心理的な探究」なのである。澁澤龍彦の要約的な説明を引用してみたい。「個体はもともと非連続であり、二つの個体のあいだには越えられない深淵があるが、ただ生殖の瞬間、二つの個体が結びついた瞬間にのみ、非連続の個体に活が入れられ、連続性の幻影があらわれる。しかし究極の連続性とは死にほかならず、この死に魅惑された連続性の幻影を見ようとする志向こそ、エロティシズムの根拠にほかならない」¹¹。

バタイユは端的に「エロティシズムとは、死におけるまで生を称えること」¹²と説明しているが、人間は、生を十全に生きようと欲するならば、死に近づかねばならないという矛盾に直面する。究極の連続性に連なろうとして、生と死の極限を突き詰めていくことがエロティシズムの真骨頂であり、美そのものであり、生の豊饒が溢れ出す瞬間なのである。三島において、この連続性を担保するのが「文化概念としての天皇」であり、それに身を捧げて殉じることが大義になり得ると考えられる。このような生き方なり考え方なりは三島独特の文学的世界観に由来する特殊なものであって、容易には承服できないことかもしれないし、現代を生きる日本人の大半には恐ろしい時代錯誤として退けられるにちがいない。しかしながら、そのような理解とは別に、これはむしろ日本人に底流する価値観として見る向きもある。

¹⁰ この図式そのものは1970年に行われた古林尚との対談で登場するが、三島のバタイユへの言及は方々に散見される。三島とバタイユの関係性については本格的に検討する必要があるが、本稿では断念し他日に期したい。なお、三島と古林の対談内容については、三島由紀夫・古林尚（2002年）『三島由紀夫 最後の言葉（新潮CD講演）』新潮社を参照のこと。

¹¹ 澁澤龍彦（1970年）「エロス、性を超えるもの」『澁澤龍彦集成Ⅲ』桃源社、5頁。

¹² ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2004年）『エロティシズム』ちくま学芸文庫、16頁。

3. 意志的な死

文化人類学者のモーリス・パンゲは「日本人の行動にあつては、しばしば、死というこの究極の行為に、苦くはあつても、理性と熟慮にもとづく意志決定が結び付いているからであり、生きるための理由と死ぬための理由とが冷静に測られている」¹³と指摘し、自分自身に死を与え得る「意志的な死」(mors voluntaria)に人間存在の比類なき「至上性」を看取している。すなわち、人間が人間として生きる、その尊厳は、ただ生きることにあらず、意志的に死ぬという果敢な行為によって担保されるという主張である。

パンゲは『自死の日本史』の中で、日本文化における切腹という死の作法、捨身、心中、殉死など、意志的に選び取られてきた死を通して、日本精神が表出されていると述べている。それは死ぬことによって生きようとする厳粛な生の姿として捉えられている。そうした視点からパンゲは三島の行動を以下のように解釈している。パンゲの表現は時に陶酔的で、いささか冗長にすぎるきらいがあるが、三島の熱情を代弁しているようにも思われるので、少し長くなるが引用しておきたい。

「日本に住む人々が死に対して投げかけて来た特有のまなざしに含まれるある種の精神の昂揚、その火が三島という人間において再び点じられ、その発する光のあまりの強烈さゆえに、それはその最後の燃えあがりになるほかはない。三島は死を欲した。いやそれだけではない。彼は<意志的な死>を欲したのだ。彼の自己意識は、そのことにおいて、何世紀にもわたる日本人の意識の反映であろうとする。一個の独自存在たる彼は、今をもって存在することをやめるという意志の純粹決定に同化することによって、より広い時間のなかに融けて行こうとする。一個の命がそこで終わる。それはひとつの歴史が生み出した命であった。だからその命の終焉はその歴史の終焉でもあった。三島というこの沈みゆく太陽の鮮血色に輝く

¹³ モーリス・パンゲ著、竹内信夫訳（2011年）『自死の日本史』講談社学術文庫、9頁。

一瞬の光芒のなかに、＜意志的な死＞をめぐる日本の伝統が一瞬のうちに燃えあがり、消えてゆくのだった。この死は多分、現実と想像とが合流するその境において、おのが狂乱を生きるべく運命づけられた一個の人間の、比類なき行為であったろう。パリサイ人らの偽善を好む者たちがそこに狂気と無意味とをしか見ようとしないのは彼らの勝手である。だがこの狂気はそのあるがままの姿において承認されなければならない。人間の歴史は、生命と生命維持の手段とを生み出すばかりではない。それらを用い費やすのも人間の歴史なのだが、そこには節目ごとに歴史の身振りいとも言うべきものが存在し、個々の人間はいずれその身振いを感ぜないわけにはいかないのである。歴史が戦慄するその場所において、恐怖でもあり神秘である、人間のうちにあって人間を超えるものが噴出してくるのである。三島は確かに一個の人間に過ぎない。だがこの独自性は、個々の孤独がそうであるのと同じように、そのまま普遍的なものなのである。日本人であろうと日本人でなかりと、三島一個の死はわれわれを襲い、われわれを捉え、われわれをうなずかせる。死が意志に向って投げ続ける挑戦はあるいは眠りこみ、忘れられるときがあるかも知れない。しかしこの挑戦がひとつの状況に出会い目を覚ますとき、人の躓きとなるべき死という虚無がその鋭い刃をもって現われ、存在がその濃密な謎をもって立ち現われてくるだろう。そのときにこそ異常なまでに過激であったひとつの行為が、みずからに死を与えることができる人間というものの比類なき至上性のもっともすぐれた例証となることであろう」¹⁴。

結びに代えて

ある理想のために主体的あるいは献身的に自己を捧げることが、それは単なる自己犠牲だ、いや犬死だと一刀両断にしてしまうことは、厳に慎むべきだろう。そこに秘められた思想の意味するところは何なのか、それを考究することは人生の問いに答えを得るための一助になるように思われるからである。ただし、それが文化概念であるとは言え、現代人が天皇に

¹⁴ 前掲書、639-640頁。

殉じることを大義と見なすことは、今日において相当に難しいことのように見受けられるし、天皇でなくとも、ある絶対的観念や超越的存在のために殉じるという対象の想定あるいは思考方法そのものに対しても、より慎重な態度で臨まねばならないように思われる。

繰り返しになるようだが、ただ与える対象があるだけで、自分自身の見返りは全く求めないという自己犠牲を、単純に無駄死にだと罵ることは短慮にすぎるのであり、その行為に利はないかもしれないが、理はある生き方であると捉えたいと思う。躍動する生命は燃焼し、いずれは廃棄される運命にありながらも保存され続け、記憶の連鎖は時間に意味を与えて、悠久の歴史となる。このような生命の捉え方あるいは用い方には献身的契機が不可欠であり、それは我執や我欲を凌駕して、私たちを精神性の高みへと引き上げていくことだろう。

ところで、バタイユは『呪われた部分』で「企業の社会」に「蕩尽の社会」を対置し、「働くこと」ではなく「供犠を行うこと」に注目している。供犠（祝祭）は「聖なるもの」を顕現させるが、そのために人間の労働による生産物を見返りなしに蕩尽するのである。それは純粹に「贈与すること」であって、神へと捧げるという契機に媒介されて、有用性（経済合理性）の連鎖を超越し、連続性の次元を開示する。まさにその瞬間に、労働し、生産し、蓄積する存在である人間は乗り超えられて、至高性を帯びるのである。この議論によって、人生を賭して自らを捧げる行為の意味について深い哲学的洞察が与えられるし、超越性、連続性、至高性を軸にした生命の精神論の展開も望まれるところであるが、それについては稿を改めたい。

【参考文献】

ジョルジュ・バタイユ著、澁澤龍彦訳（1973年）『エロティシズム』（バタイユ著作集 第7巻）二見書房。

ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2004年）『エロティシズム』ちくま学芸文庫。

ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2018年）『呪われた部分—全般経済学試論・蕩尽』ちくま学芸文庫。

14 精神文化学研究[第8号]

井上隆史・久保田裕子・田尻芳樹・福田大輔・山中剛史共編（2021年）『三島由紀夫小百科』水声社。

三島由紀夫（2006年）『文化防衛論』ちくま文庫。

小高根二郎（1970年）『蓮田善明とその死』筑摩書房。

モーリス・パンゲ著，竹内信夫訳（2011年）『自死の日本史』講談社学術文庫。

酒井健（2005年）『バタイユ』（哲学の現代を読む1）白水社。

澁澤龍彦（1970年）『澁澤龍彦集成Ⅲ』桃源社。

執行草舟（2025年）『永遠の三島由紀夫』実業之日本社。

城山三郎（2020年）『大義の末』（新装版）角川文庫。

杉本五郎中佐遺著，戸塚陸男解説，大義研究会監修（2019年）『大義』（改訂第三版）産経メディックス。

田坂昂（1985年）『三島由紀夫入門—三島美学の核心と作品にみるその構造—』オリジン出版センター。

湯浅博雄（1997年）『バタイユ』（現代思想の冒険者たち11）講談社。

※本稿は2024年11月4日に開催された精神文化学会第14回学術大会（京都産業大学むすびわざ館）で行われた特別講演「ほとぼしる生命の昇華あるいは消尽—大義に殉じるといふこと—」の内容に基づき，修正加筆を施したものである。